

独本土上陸作戦

——金博士シリーズ・3——

海野十三

青空文庫

およそ新兵器の発明にかけては、今日世界に及ぶものなしと称せられる金博士が、とつぜん謎の失踪をとげた。

おどろいたのは、ここ上海市の地下二百メートルにある博士の実験室に日参していた世界各国の兵器スパイたちだった。

実験室は、きちんと取片づけられ、そして五分置きに、どこからともなくオルゴールが楽の音を響かせ、それについて、

“余は当分失踪する。これは遺書である。ドクトル金”

と、姿は見えないが、特徴のある博士の声で、この文句がくりかえし響くのであった。録音による遺書が、オートマテイクに反復放送されているのだった。

あの新兵器発明王金博士のとつぜん失踪！

博士を監視していた五十七ヶ国のスパイは、いずれも各自の胸部に、未だ貫通せざ

る死刑銃弾の疼痛を俄かに感じたことであつた。

一体、博士はどこへ行つてしまつたのであろうか。

人騒がせな博士の失踪は、精神錯乱の結果でもなく、況んや海を越えて和平勧告に行つたものでもなかつた。しかし金博士の上陸したところは、スコットランドであつて、グラスゴー市の西寄りにある秘港グリーンノックであつた。

金博士は、上陸に際し、右足の踵に微傷を負つたが、それは折柄丁度、英軍の高射砲が襲来独機を射撃中であつて、その高射砲弾の破片が、この碩学泰斗の右足に当り、呪いにみちた傷を負わしめたのであつた。が、まあ大したことはなかつた。

「上陸第一歩に際し、イギリス官憲のみならず、イギリス高射砲隊からもこの鄭重なる挨拶をうけようとは、余の予期せざりしところである」

と博士は、折から空襲実況中継放送中のBBCのマイクを通じて、訪問の初挨拶をしたのであつた。

接伴委員長のカーボン卿は、金博士が、あまりにも空爆下に無神経でありすぎるのに愕き、周章てて持薬のジキタリスの丸薬をおのが口中に放りこむと、金博士を棧橋の上に積んだ偽装火薬樽のかげに引張りこんだ。

「ああカーボン卿、ドイツ空軍のために、こんなに行き亘わたって爆撃されたのでは、借間しゃくまが高くなつて、さぞかし市民はたいへんであろう」

「おお金博士。仰おっしゃ有るとおりです。借間の払底ふつていをはじめ、そのほかわれわれイギリス国民を困らせることが実に夥おびただしいのです。このときわれわれは、はるばる東洋から博士を迎え得て、千万トンのジャガ芋いもを得たような気がいたしまする」

「ジャガ芋とは失礼なことをいう、この玉蜀黍とうもろこしめ」

と、博士は中国語でいつて、

「この空爆の惨害さんがいを、余にどうしろというのかね」

「いやいや、余は何とも申したわけではない。博士どの。イギリス上陸のとたん、ぜひとも御注意ねがわねばならぬことが二つあります」

「二つ？ 何と何とかね」

「一つは、さつき申し遅れましたが、味方の撃ちだす高射砲弾の害。もう一つは、おそろしきスパイの害。——とにかく街上でもホテルでも寢床の中でも、おそるべきスパイが耳を澄して聞かんとしていると思召おぼしめして、一切語りたもうなよ」

「本当かね。まるでわが上シャンハイ海そつくりじや」

「故に、物事を、スパイや敵国人のため妨害されないうまく搬ぼうと欲すれば、それ、決して何人にも機密を洩らすことなく、自分おひとりの胸に畳んで、黙々として実行なさることである」

「お前さんのいうことは、むずかしくて、余には分らんよ」

「いや、つい騎士俱樂部風の言葉になりましたが、要するに、自分の思ったとおり仕事をやりとげるためには、機密事項は一切お喋りなさるなどという忠言です」

「なるほど、壁に耳あり、後にスパイありというわけじゃね。よろしい。今日只今より、大いに気をつける。尤も、わしはスパイ禍をさけることなら、上海でもって、相当修業して来ておりますわい」

「それを伺って、安心しましたわい」

折から高射砲は、撃ち方やめとなり、往来はようやく安心できる状態となった。そこで瘠軀鶴の如きカーボン卿は、樽のかげから外に出て、一応頭上を見上げたうえで、樽のかげの金博士の手を取って、引張り出したのであった。

「さあ、今のうちに急いで参りましょう」

「はて、余はどこへ連れていかれるのじゃな」

「行先は、今も申したように、スパイを警戒いたして申せませぬ。しかし、向うへ到着すれば、そこが何処だかお分りになりましょう。グローブ・リーダーの巻三には、『ロンドン見物』という標題ひょうだいの下もとに、写真入りでちゃんと詳しく出て居ります場所です」

「ありや、行先はロンドンですかい」

「ロンドン？ あつ、それをどうして御存知ごぞんじですか。博士は、読心術どくしんじゆつを心得て居らるるか、それともスパイ学校を卒業せられたかの、どつちかですなあ」

「あほらしい。お前さんが今、ロンドン見物の標題うんぬんで云々うんぬんといったじゃないか。お前さんがたのここんところは、連日連夜のドイツ軍の空爆で、だいぶん焼きが廻つて見える」

そういつて、金博士は、自分の頭を、防毒マスクの上から、こつこつと叩いてみせた。

ロンドンの地下ホテルの大広間で、国防晩餐会ぼんさんかいが催もよおされている。

その大広間は、一見いつけんひろびろとしていた。ただ真中のところに、一つの卓子テーブルと、それを取囲む十三の椅子とが、まるで盆の真中に釘ボタンが落ちているような恰好かつこうで、集っていた。そして卓上には、贅ぜいたく沢な料理が、大きな鉢に、山の如く盛り合わされ、そしてレットルを見ただけで酔っぱらいそうな古いウイスキーやコニヤックが、林のように並んでいた。

そのとき、広間の北側の扉ドアが、さつと左右に開いて、金ぴかの將軍が十二人と、それから肘ひじのぬけそうな黒縷子くろしゆすの中国服を着た金博士とが、そろそろと立ち現れて、その設もうけの席についた。

「さあ、ぼつぼつ始めましょう」

「各自、好きなように、セルフ・サーヴィスをして頂きましょう」

ボーイたちは、完全にこの大広間から追い出されていた。しかもこの料理は、五百パーセントの闇値段やみねだんで集められた豪華な料理であつて、これすべて、遠来えんらいの金博士——いや、イギリス政府及び軍部が今は命の綱と頼む新兵器発明王の金博士に対する最高の饗きよう応おうであつたのである。

「さて、早速ではあるが、金博士に相談にのっていただくことにする」と、座長格の世界戦争軍総指揮官、ゴングラ大將が口を開いた。

「なるべくなら、この御馳走を全部頂戴してのちに願いたいものじゃが」
金博士は残念そうにいう。

「いや、事が事とて、ぐずぐずして居れないのです」

と、総指揮官ゴングラ大將は、かまわず話をすすめる。

「これは今夜はじめて諸君にかぎり発表する最高の機密であるが、実は、わがイギリス軍は、最早如何ともすべからざる頽勢を一挙に挽回せんがために、ここに極秘の作戦を研究しようとしている。それは如何なる作戦であるか」

と、ゴングラ大將は、そこで大いに気を持たせて、一座を見廻した。

（おや、十三の座席は、縁起でもない）

將軍は、ちよつと顔を曇らせたが、胸の前で十字を切つて、

「それは外でもない。十三——いや、諸君、愕いてはいけない。吾輩は、ここに極秘の独本土上陸作戦を樹立しようと思う者である」

一座は、俄かにざわめいた。將軍のなかには愕いて、手にしていた盃を取落とす者もあ

り、嘸み下ろしかけていた若鶏わかどりの肉を気管きかんの方へ送りこんで目を白黒する者もあつた。ただ平然として色を変えず、飲み且つ喰くう手を休めなかつたのは金博士ばかりだった。

「独本土上陸作戦、それは英本土上陸作戦の誤植ごしょく——いや誤言ごごんではないか」

「否いな、断じて、独本土上陸作戦である」

「ほほつ、ゴンゴラ総指揮官の精神状態を医師に鑑定せしめる必要ありと思うが、如何に」

「いや、もう一つその前に、全国の空軍基地に対し、単座戦闘機たんざせんとうきにゴンゴラ將軍を搭乗とうじせしめざるよう厳重命令げんじゆうすべきである」

「その必要はあるまい。なぜと云つて、ゴンゴラ將軍は、幸いにして飛行機の操縦さいわが出来ないから、安心してよろしい」

ゴンゴラ総指揮官は、頬をトマトのように赭あかくして、卓たくを叩たたいた。

「何人なんびとが何といおうと、独本土上陸作戦を決行する吾輩の決意には、最早変りはない。ドイツを屈服くつぷくせしめる途は只一つ、それより外に残されていないのである」

一座は、尚も喧々囂けんけんごうごう々々、納まりがつかなくなつた。あちこちで、同志討どうしうちまどが始まる。

「なにも、そんな危い芸当をやらないでも、もつと確実に、しかも安全にドイツをやつ

ける方法があるんだ」

「そんなことはないでしょう。自分は総指揮官の作戦に同意する」

「それは愚劣ぐれつきわまる。よろしいか。わしの考え出した作戦というのは、至極しごく簡単かんたん明瞭めいりょうである。それは、ドイツに対して『わがイギリスは貴国を援助するぞ』と申入れれば、それでよろしいのじゃ」

「なんだ、それは。敵国ドイツを助ければ、わがイギリスはいよいよ負けるばかりだ」

「それだから貴公きこうは、駄目だというんだ。ちと歴史を勉強しなされ、歴史を。今度の世界戦争以来、わがイギリスが援助をすると申入れた先の国で、滅びなかつた国があるかね。

ベルギーを見よ、和蘭オランダを見よ、チエツコを見よ、ポーランドを見よ、それからユーゴを

見よ。ギリシヤを見よ、蔣介石しょうかいせきを見よ。だから、われわれイギリスが、『ドイツよ、

お前を助ける』と申入れただけで、ドイツも亦また、滅びざるを得ないであろう。これ、歴史上の事実から帰納きのうした最も正確にして且つ安全な作戦じゃ」

仲々一座の納りがつかないので、ゴンゴラ総指揮官は、席を立って、金博士のところへやって来た。

「金博士。吾輩の切なるお願いである。新奇なる兵器を作って、わがイギリスの沿岸えんがんか

ら発し、独本土へ上陸せしめられたい」

このとき、金博士は、ようやく卓上の料理を悉く胃の腑に送り終った。博士は、ナツプキンで、ねちやねちやする両手と口とを拭いながら、

「ああ余は遠く来た甲斐があつたよ。ほう、美味満腹だ。はて、何といわれたかね」と、取り済ました顔である。

「おお金博士。今も申すとおり、吾輩の切なるお願いである。新奇なる兵器を作り、わがイギリスの沿岸より発し、独本土へ兵を上陸せしめられたい」

ゴンゴラ総指揮官は、声涙共に下つて、この東洋の碩学に頼みこんだ。すると博士は、

「ああ、それくらいのことなら、至極簡単にやつて見せるよ」

「えつ、本当に出来る見込みがありますか」

「ありますとも。そんなことは、人造人間戦車の設計などに較べれば訳なしじゃ」

「おお、それが真実なれば、吾輩は天にもものぼる悦び——いや、とにかく大きな悦びです」
「しかしのう、ゴンゴラ大将。それについて、余は、篤と貴公と打合わせをしたいのじやが、この席ではなあ。つまり、こう沢山の人々の耳に入れては、それスパイに買取せられ

た耳も交まじつているかもしれない。二人切りになれないものかな」

「ああ、そのことなら、吾輩としても、願つてもないことです。よろしい。では他の將軍たちを退場させましょう。おい諸君。君たちは一時別室へ遠慮せよ」

さすがに総指揮官の一声で、他の將軍たちは、ぶつぶつがやがやいいながら、ゴンゴラ大將と金博士をそこに残して、元來た扉ドアから出ていつてしまった。

「さあ、もう一杯、いきましよう」

「すこし廻りすぎたが、もう一杯頂戴するか」

あとは二人が水みず入らずで向い合つた。

金博士は、そのとき顔を將軍に近づけていった。

「今誓約したことは、必ずやります。しかし一体、独本土へ上陸といつて、どこへ上陸すればいいのかな。ブレーメンかキール軍港ぐんこうのあたりまで行かなければ満足しないのか、それともドイツの占領地帯で、お手近てぢかのドーヴァ海峽かいきょうを越えて旧フランス領のカレーあたりへ上陸しただけでも差支さしつかえないのか、一体どつちを望むのかね」

金博士に大きく出られて、ゴンゴラ総指揮官は、碧あおい目玉をぐりぐり廻わし、

「どつちでも結構ですが、一つ早いところ上陸して貰いたいですねえ。ドイツ兵のいる陸

地へ、こつちからいつて上陸したということになれば、そのニュースは、ビッグ・ニュースとして全世界を震撼し、奮わざること久しきイギリス軍も勇氣百倍、狂喜乱舞いたしますよ」

「狂喜乱舞するかな。それはどうかと思う」

「いや、狂喜乱舞することは請合いです」

「そうかね。そこのところは、余にはよく呑みこめないが、とにかく、上陸作戦をやるについて、予め種々、貰うものは貰つて置きたい」

「ああ、これは申し遅れて失礼をしました。成功の暁は、博士の測り知られざるその勲功に対し、いかなる褒賞でも上奏いたしましょう。いかなる勲章がお望みかな。

ダイヤモンド十字章はいかがですか。また、何もイギリスの勲章に限つたことはない。和蘭の勲章はいかが、それともポーランドの勲章は。エチオピアの勲章でもいいですぞ。それともフランスの勲章にしますか」

「勲章など貰つても、持つて帰るのに面倒だから、いやじゃ。それよりも、当国逗留中は、イギリス製のウイスキーを思う存分呑ませてくれればそれでよろしい。今のうちに呑んでおかないと、きつとドイツ兵に呑まれてしまうからね」

「縁起でもありませんよ」

「しかしのう、ゴンゴラ將軍。さつき余が、貰うものは貰って置きたいといったのは、そんなものではないのじゃ」

「え、勲章の話ではなかったのですか」

「東洋人というものは、お主ぬしのように、左様さように貪慾どんよくではない。余の欲しいのは、白紙はくしめ命令書だ。それを百枚ばかり貰いたい」

博士は妙なことをいいだした。白紙命令書というのは、まだ命令の文句が書いてない命令書のことであつた。

「白紙命令書百枚もよろしいが、何にお使いですかな」

と、ゴンゴラ將軍は腑に落ちない顔。

「知れたことじゃ。お主から頼まれた一件を果すためには、万事極秘でやらにやららん。だから余だけが計画内容を知っているということにするには、白紙命令書を貰ったのが便宜べんぎなのじゃ。尚その命令書には『追おっテ後ごじつ日何等カノ命令アルマデハ本件ニ関シ総指揮官部へ報告ニ及バズ』と但ただしがき書を書くから、予め諒りようしやう承しょうありたい」

3

ゴングラ総指揮官は、遂に白紙命令書百枚を金博士に手交して、博士の手腕に大いに期待するところがあった。

ところが、それから一週間たつても、二週間たつても、金博士が一向動きだしたという知らせに接しないのであった。

将軍のところへ出入する情報局蒐集官たちは、決して、将軍から同じ趣旨の質問を受けるのだった。

「おい、金博士の動静についてのニュースはないのか。すくなくとも一卷のニュース映画になるくらいのもは持って来い」

将軍は、金博士の行動のニュースに飢えているのであった。

情報蒐集官たちは、残念ながら、博士についてのニュース材料の持ち合わせがなかった。それで次回から、せいぜい気をつけることにして、金博士の身辺を猫犬の如く、或

いはダニの如く、或いは空気の如く搦みついて、何を博士が実行に移しているかを調べたのであった。

その結果は、毎日毎夜それぞれの情報蒐集官から、ゴンゴラ総指揮官のところへ集つてきた。

「金博士は、本日午前十時、セバスチアン料理店に現れ、午後二時まで四時間に亘り昼酒をやり、大いに酩酊せり」

「ふん、大いにやつとるな」

と、ゴンゴラ將軍は次の報告書を取上げる。

「金博士は、本日午後二時十五分より、カセイ・ホテルに現れ、飲酒三時間に及べり。午後五時三十分、退出す」

「よく飲むなあ。身体をこわさなきやいいが……」

次の報告書には、こう書いてあった。

「金博士は、本日午後五時四十五分、ピカデリー街に於て、数名の東洋人に襲撃せられ：

……」

「おや、これはニュースらしいニュースだ」

と、総指揮官は、思わず前に乗りだして、さてその次を読むと、

「……街^{がしじょう}上に於て、ウイスキーのラツパ呑みを強要されしが、それより博士の提案により、会場をコルコット街裏^{がいに}通りのバー、ホーンに於て一同揃つて痛飲^{つういんかい}会が開催^{かいさい}せられることとなり、同夜午後十一時まで、通計^{つうけい}五時間……」

將軍は、苦^{にが}り切つて、その報告で涙^{はな}をちんとかむと、紙屑籠^{かみくずかご}へ投げこんだ。

「金博士は、地酒窟^{じざけくつ}ランタンに現れ、午後十一時十五分……」

どこまで読んでいっても、金博士が酒を飲む報告書ばかりであつた。將軍は、うんざりしてしまつた。

氣をつけていると、毎日毎夜、集つてくるどの報告書も、飲酒の実績報告ばかりであつて、その中に只の一枚も、「金博士は、机に向い、設計用紙を前にして、計算^{けいさん}尺^{しゃく}をひねりつつあり」とか「金博士、只今、バーミンガムの特殊鋼^{とくしゅこう}工場へ、マンガ鋼^{こう}五十トンの注文を発せり」などという工作関係のニュースは入つていなかったのである。ゴンゴラ総指揮官は、飛行機にのつて特殊飛行をやつてみたい衝動^{しょうどう}に駆^かられて、弱つた。

ついにゴンゴラ総指揮官の勘忍袋^{かんにんぶくろ}の緒^おが切れ、警衛隊に命令して、金博士をオムスク酒場から引き立て、官邸へ連れて来させたのであつた。そのとき金博士は、へべれけに

大酩酊のていたらくであつた。

「うーい。こら、こんな面白くない酒場へ引張つて来やがって。こーら、そこにいる大将。早くジンカクを持ちこい」

ゴンゴラ大将は、仁王様におうさまがせんぶりの粉こなを嘗なめたような顔をして博士のぐにやぐにやした肩を驚わしづかみにした。

「これ、金博士。いかに酒好きとはいえ、酒ばかり呑んで、吾輩との約束を無にするとはいかん遺憾いかんである」

総指揮官は、極きよくりよく力腹の虫を殺して、春の海のように穏おだやかに云つた。

「おお、お主はゴンゴン独楽こまのゴン將軍じやつたな。今聞いてりや、聞いちやいらねえことを余よに向つていつたな」

「吾輩は、三週間、いらいらして暮した。その間博士は酒ばかり飲んで暮した。例の仕事には、すこしも手がついていないではないか」

「あつはつはつはつ」と博士は笑つて、「お主は、そのことを心配しているのか。余はイギリス人のように、やるといつて置いてやらん人間とは違う。疑うなら、見せてやるものがある。さあ、余の右足をもつて、力一杯引張れ。おい、早くやれ。酒を飲む時間が少く

なる。なにしろイギリス製ウイスキーとも、間もなくお別れだからな。おい、引張れ」
ゴンゴラ総指揮官は、博士に催促さいそくされて、床に膝をつき、博士の右足をつかんで、えいと引いた。すると、すぽんと音がして、博士の右脚が、太腿ふともものあたりから抜けた!!

4

……と見えたが、驚くことはない、実は金博士が右脚に履はいていた肉色の超長靴ちようながぐつが、すぽんと抜けて、ゴンゴラ將軍の手に残っただけのことであった。

「ひやーっ」

千軍万馬せんぐんばんばの將軍も、これには胆きもを潰つぶし、博士の一本脚——ではない実は超長靴を、絨じ毯ゆうたんの上に放り出した。博士は、それを無造作むぞうさに拾いあげ、その中に手を入れると、やがて一枚の青写真を引張りだした。

「ゴンゴラ將軍。これをお目にかけてよう」

將軍は目をぱちくり。膝の上に青写真を展^{ひろ}げて、二度びつくり。

「これは、素晴らしい新兵器だ。一人乗りの豆^{まめ}潜^{せん}水^{すい}艇^{てい}のようだが……」

「將軍よ。これは初めて貴官と会見した日、宿に帰つてすぐさま設計した渡洋^{とやう}潜^{せん}波^は艇^{てい}だ」

「ああ実に素晴らしい。さすがは金博士だ。これを如何^{いか}に使うのですかな」

「これはつまり、一種の潜水艇だが、深くは沈まない。海面から、この艇^{ふね}の背中^{しょうや}が漸^{ぼつ}く没^{ぼつ}する位、つまり数字でいえば、波面^{はめん}から二三センチ下に潜^{くぐ}り、それ以上は潜らない一人乗りの潜水艇だ」

「ふむ、ふむ」

「これを作つたわけは、如何なる防潜^{ぼうせん}網^{もう}も海面下二メートル乃至十数メートル下に張つてあるから、普通の潜水艦艇では、突破は困難だ。また普通の潜水艦艇では、機雷^{きづい}にぶつつけるかもしれないし、警報装置に引懸^{ひっか}つて所在^{しかん}が知れるし、どうもよくない。そこでこの渡洋潜波艇は、海面とすれすれの浅い水中を快速で安全に突破するもので、つまり水上と防潜網との隙間^{すきま}を狙^{ねら}うものである」

「ほう、素晴らしいですなあ」

「しかし、これは試作しただけで、余は取り捨てたよ」

「おや、勿体ない。使わないのですか」

「駄目じゃ。やっぱり相手方に知れていけないのじゃ。つまり海面と防潜網との隙間を行くものではあるが、こいつを何千何万隻とぶつ放すと、彼岸に達するまでに、彼我の水上艦艇に突き当るから、直ちに警報を発せられてしまう。従つてドイツ本土上陸以前に、殲滅のおそれがある。これはやめたよ」

「惜しいですなあ。すると、これは取りやめて、以来自暴酒というわけですか」

「とんでもない。余はイギリス人とは違うよ。余は既に、ちゃんと自信たつぷりの新兵器を作つた」

「それは、どういう……」

「莫迦。現行兵器の機密が、他人に洩らせるものか」

「でも、吾輩は総指揮官……」

「総指揮官として信用は出来ない。とにかく余は貴官と約束したところに従い、現実に独本土上陸をやつて見せた上で帰国しようと思う。百の議論よりも、一の実行だ。実績を見せれば、文句はないじやろう」

「なるほど。すると博士御発明の独本土上陸用の新兵器は、目下続々と建造されつつ

あるのですな」

ゴンゴラ將軍の瞳が耀かがやいた。

「その建造は、二週間前に終った。それから、搭乗員とうじょういんの募集にちよつと手間どつたが、これも一週間前に片づき、目下もつかわが独本土上陸の決死隊二百名は、刻々こくこく独本土に近づきつつあるところじゃ。これだけは話をしてやつてもええじやろう」

「人員二百名は少いが、とにかく刻々独本土に近づきつつあるとは快報です。大いに期待をかけますが、果してうまくいくですかな」

「なにしろ、独本土へ上陸しようというイギリス軍人の無いには愕おどろいた。折角せつかく作つたわが新兵器も、無駄に終るかと思つて、一時は酒壇の底に一滴いつてきの酒もなくなつたときのような暗澹あんたんたる気持に襲われたよ」

「しかしまあ、二百名にしろ、決死隊員の頭数あたまかずが揃つたは何よりであります。本官の名誉はともかくも保たもたれました」

「さあ、どうかなあ」

「えっ」といつているとき、幕僚ばくりようが部屋へとびこんで来た。

「総指揮官。只今ドイツ側がビッグ・ニュースの放送をやって居ります。事重大ことじゆうだいです

が、お聴きになりますか」

「重大事件？ ははあ、あれだな。スイツチを入れなさい」

スイツチが入つて、ドイツ放送局のアナウンサーの声が高声器から流れだした。

「……繰返して申上げます。本日午後五時、二百名より成るドイツ将校下士官兵の一隊

は、イギリス本土よりわが占領地区カレール市へ無事帰還いたしました。これは、目下イギ

リスに在る金博士の発明になる深海歩行器によつて、ドーバー海峡四十キロの海底を突

破し、無事帰還したものであります、実に劃期的な大陸連絡でありました。因に金博

士の深海歩行器というのは、直径三メートルばかりの丈夫なる金属球でありまして、

中に一人の人間が入り、局所照明灯により、前方の機雷や防潜網を避けながら歩行

機械により海底を歩行出来る仕掛けになつて居りますが、十分ドーバー海峡下の水圧

には耐えるようになって居ります。その他のことについては、機密になつて居りまして、

詳細をここに述べられませんのは遺憾であります、尚今回の壮挙のエピソードとい

しまして、最初金博士は、この大発明兵器深海歩行器に搭乗する決死隊を、イギリス軍隊

の中に求めましたが、何分にも赫赫たるドイツ軍の戦績とダンケルクの敗戦を想起し、

一人の応募者もありませんので、遂に金博士は腹を立て、予て捕虜として収容されあり

し前記二百名のドイツ軍人に独本土上陸の希望を問と合あわしたところ、一同大喜びにて、決死隊に応募し、遂に今回の大成功を見たものであります。……」

ゴングラ総指揮官が真赤まっかになつて金博士の方に振返つた時には、既に博士の姿は卓上の酒壇と共に、かき消すように消え失うせていた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1941（昭和16）年7月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：まや

2005年5月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

独本土上陸作戦

—金博士シリーズ・3—

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 海野十三

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>